

推
廣
醫
學
書
庫

特別
14
1919
209

2m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

○柳茶席泡草 紙冊 又収三年板上野源
 信元の芳りア不 本邦上古より古雅絵画の
 数をあれども此等は元氣とて而する芳
 气亦は昇の作と云ふ(筆者)本邦古史書
 りをあらうと云うべき者ニシテ、此中の二
 とき以てく跡す(筆者)アラマサ
 余嘗て此中を云々未だ見ずれる之んを更
 ふ瘦めし初也之んを後母ちを得どと、今
 有ニ三節とわゆる事あり御をま
 す。傳と体代りのを考ス次ハアラマサ

一 法隆寺寶物と覽聖龕よりくわちこれ
子と榮廢期とを彰んば、かくはれ
つけんまう、もつておもへば聖像のし
よもすは是々すぐ面、いふてえ雲
と傳つものとまが唐人の事と云ふ
本體とつづくよとを隋の代とある
ハスシテ先づりとある

一 平田寺勅使、弘福寺僧綱所務牒、東寺
封戸牒、法隆寺就あ帳のことと古墨
跡ハ佐史のためと不思へけんとサ義
教すると云ふと叙書の祝式
といむ捺印のあらまれ唐人のやせ

主と符を合セ一筆ボクテテ御文
準校セえ一端をみてよしんで、えま
のうの書檀の御き行とてう宋朝
傳ヘニ王の風と称賛セし
とお七への足等の墨跡の傳りうる
いふてありとも、之をも複化宣
和の後方重復おもせさん、てて金
虜の東庭よちと失うんこのうるき
事と勅使或ひいハ無事宣言して軽
かくせざるもんをもじるもむかひ處
れどもて西の御の場との略仰す
べきもとある

(種) 油鐵隆寺寶物あり者を以てす
ひし又曰く大代又ちり主觀をと

要する所以て之をも

前山也と至る

一三行二三行の如きを云ふ者
キニトモト古事記の得うべきものハ
二行三行づゝ截断して散逸せしもの見
さんとも今あるといふ。又鑒賞者
黄鐵紺金卦、銀界の格子もまた
上等を云ふ油鐵太秦切といふ。廣
隆寺傳へて云ふと截断せし事も
是れを油鐵金泥と塔の下に有るに

またもよろしく、また雲母地の唐壁
あるりしそう。また向地扇地細ます
大風冠の如きをあれ。金泥も亦の如き
角武峰切といふ。金鹿草、雲龍の不
絶玉紙なども一通り向地の又金泥
玉、これしあし油鐵紀泥あり。聖武
天皇の御用と油鐵金泥あれ。おさん
も亦淺黄毛紙向地黄人絵あり。元
貞室院の御用と油鐵金泥金界の御
本、また金界、小草木きの泥絵あり。低
玉也。古文書の墨紙、又印泥を散

まゝ頭地をすまゆる在の墨絲の多魂
かえりとむち虫官切とのふ中ゆ姫を
黄鶴と称後淨土院をうんじて
いゆる北格とくらむにゆもとえふ
ハ、みゆひ充あとくまくお居するよ
べしとれもそきすさうゆれ火の災
すくもゆんばいとまうぢん

(批) えむるふ事を仰ゆるもの又里
せり一節大いに鍔鎧堂家の天慶と
てまうる又里芳吉の後傳吏よ
身

一齋集) えむる多かくは碑碑ハ壺碑ミシ元

やくへ人のゑとて金匱ヌ多胡碑と
えんじて古くありてくわしく人も見え
御く長崎始めのゑ碑をやりーと
えの壺碑は記せしとくとあゆぬ
人のむふとくとくとくとくとくとくと
あひとまうじ、かゝる宗長が正路のまゝ
誠年左馬川、並松別あつて駒上郡
地名(左馬川並松別駒上郡内郡の
駒上人)并松別駒上人(内郡の
駒上人)もかくめねまきくん行秋もかく
別高、俗と長野、姓、石上也、並松、上田
多胡郡井官符碑文號曰太政宣高
穗枝就玉、左大臣正二位石上尊哉文

至國有布當社、ちうとを並、おもへば本邦不碑
のむきあくえくとて土のうち胡碑と鬼
もいつへし

因云こり碑文の下に給半といふある
庶負幹う役、半、半のよもんといひ
あくと羊といひ人ありて名をいひ
う半、西、小憲氏の役、いひ
源氏西ノ羊善おもへる給半といふ
こうこうといひ金より、やくらも
続紀と北郡も、いんじと何のあま
記すが、今御へうそすこしきう
れや北郡の郡一つ給りとさん

小豆ニシテモアリ候、勢をせること
ウスレシテ終もあらず、至キ、又何
ともやえぬ、給半の義も、今をこ
半ノ役、奴心にひたる宗子を役とす
さば、貢幹う役、う役、二つ、半の家の
點画を並し、あるべきや何
とある、は養養、辛辛、換益する
之と、又ふ唐人の書も、もんとふ羊
半の換益するを並べて、こそ、主に、家
の事とつづる、成給半と、もんとふの続
記の事とすたうへる、似る

(拾) 余多胡碑の模刻一本を元

其ま奇古の言ふに又曰く七碑
の永元六年の考もえあることと其會
多セリ陰布多シしめを以て得ニ
水也とすと利約申の所也

一 文章の奇古典雅と云ふは不るいづ
くものあると云ふ是上考すと世ニ年
の御時ノ事と云ふ隋煬帝、大業元
年よりあくまで漢故の遺風を追
ひう朝の文格を準セん一事而
已

寛弘のまほ漢紀と出でて之を從ふ
ヨリオニ二章一と何人非貴是法非李

を不字のことを用ひ、是漢人の格と
史記陳平世家と為相非況事、また
賈誼傳と漢法令非行也とて、又ふ
不字の法とし、ガオニニ章一と君則天
之、臣則地之、之字を助字のことと用
いひ。是論徳ト亡之命矣夫、家法ト
義性命之形骸之不可易也、金縢ト禮
亦宜之、文王世子と冬忘如之、史記と以入
也膏火燭度不滅焉人之とす、又ふ
後助也と云しソリ、ガオニニ章一と不礼而
下非礼、下無礼以也有罪、不字を乞字
のことを用ひむか、さんざん肉秦の

法事、禮記三年間事、無易之道也とい
ふ事、無猶不とす。是茅亭ノ大殿不
リ。又不詳云々といひ別々書法詳記

一卷あし

さうと上喜を子ハ又子の大祝と申すを
いへキ、云々

一畫の大きさより法隆寺又傳えむをす有
る。是方源圓が作たるの
草木山としの傳、ト、ト、ト、おもへば
獨我あるのみ實く、又、又、又、又、又、
膚恩の歴もこれくちうとく、又、又、
奉年も花めことをきく、うか宇宿

オの寶物とつて金遺百金
減れず。き、寶物とす。や、
桺秦門前ノ若高栗原平也(代元)ノ幕下大刻
す後と號す。ち四冊とし全之いせんえども
至宝自力の元とあら化名七枚の坂を新わ
し又の刻年の頃また詳考し。名をと
らへてよし。一後の後史と記す。すあま。す
至宝と號す。又二萬の上四史行幸を。其の若
きとす。

○唐領萬物の無窮出しうけん敵をと何をゆ
と。其の御身はと多くのと故に。のと
ゆ。ナラミ。而もうい節。セアム。其の行

少しくれり氣きへとひきあはれること思つてゐる
まん行ゆきの手てをもせまし、此こに身みをもてて
こゝ、田舎いなかのむすゞと掛けられ、千えくをも
て、こゝに、牧まきをまつて、こゝに、金かなをもてて、
生うれ、木木をもてて、作つくり、煙えんを
吹ふし、名要めいようのゆゑゆゑを、持もつて、得とて、あはれう
こゝに。

○おもに雨あめのぬかるみで、まづ、朝鮮あさひと事実
そよぎのゆゆ、ひのくに、中井柳樹なかいりゆ、中井柳樹なかいりゆ
う朝鮮あさひの、兵ひょうの、手てをもてて、刀とへと、手てをもてて、刀とへと、
鮮あさひの、鈍とが波なみをもてて、と、うそ、主おも流りゅうの、鎮寺
府ふ、出で来らて、そぞろ、防備ぼうびすえ、國こく教きょうつて、そぞろ、

瀋洲せきしゆに入つて第一に目を驚おどろかすものは露國あわくに。
が經營えいぎの壯大じょうだいなる事ことなり。青泥窪せいねいくわに英佛連
合軍えいぶつれんぐんが始めて船ふねを繫つきし處ところは柳樹屯りゆじゆとん附近に
して、今いまの港内こうないは風かぜ荒あらくして船舶ふなを破泊ははく、
せしむる能のうはざりしに、露國あわくにの青泥窪せいねいくわ市長しぢやう、
サワロフさわろふは工兵こうへい少將しょうじょうにて、土木どぼくに精通しゆうこんせし
人ひとなるを以て、先づ港外こうがいに壯大じょうだい堅牢けんろうなる大
幅六十間長一里餘りよ突堤三條さんじょうを築つき、一
萬噸以上じょうじょうの船舶ふなを横附よこつきにするを得せしめ
模もの壯大じょうだいなる七千噸位じゅせんとういの船數度ふねすうどを補ほに列せ
しむるを得べき計畫けいかなりしが如し。陸上に
は廿五じゅうごの村落そらくを市制しげ内うちに編入へんにゅうし、一の中心
地ちを設けて十條じゅうじょうの市街しがいを開き、巍々わいわいたる洋
館がんに聳ゆる光景こうけいは歐洲おうしゆ諸國しょくこくの大都會だいがいも之
全なるものは少すくなく、煉瓦れんばの骨ほのみ残りし
上うにトタとたン或もは板いたを覆おおふて縫ぬいに人の住す戸とす

るるものあり、其規模ほの壯大じょうだいなる實じつに露くに
堪こなへたり。
旅顧りょくごの經營えいぎに至いたては更ますに謹そだてくに足あつるべき
のあり。當局者とうきょくしゃの談だんに據すわれば、露國あわくには青泥窪せいねいくわ
の經營えいぎに五億萬圓ごひゃくまんえんを拋なげら、旅顧りょくごには更ますに十
億萬圓ひゃくまんえんを投なげせりとの事ことなれば、其經營えいぎの大
は之のに依よても察さするを得べし。但し青泥窪せいねいくわ
は其起伏きふくの形勢けいせいは確たしかかに輪わんで、永久築城じゆじゆ的てきの砲壘ほうらい
砲臺ほうたいを築つき、其胸壁きょうはくに掩おんへる鐵板てつばんの厚あつさは
世界最大體せかいさいだいたいの甲鐵こうてつに二倍乃至三倍さんばいせるもの
ありといへる一事いつにても、其堅牢けんろうなること
を察さすべし。去されば遠とほきより之のを望めば、若石礎わかせき々として一草一木いのしもなき秀山しゆざん、生産せいさんによ
り見れば一文いちもんの價ひなき平々ひらひらたる凡山ぼんざんも、實
は數百萬すうひゃくまん乃至數千萬圓じゅせんまんえんの價ひを有せざるもの
なし。露國あわくには經營えいぎの初はじより外國人わいこくじんには對たい
遠鏡えんきょうを用もちねしめず、又た高たかきに登のりて展望てんぼう
することを許ゆさざりしが故ゆゑに、今日まで其そのの真相じゆうじょうを詳くわにするを得ざりしといふ。

次つぎに東清鐵道とうせいてつどうの大規模だいきぼくなるにも一驚おどろを喫す
へし。駁地はつちは清國せいこくの地じを無代むだいに使用しようしたる
が爲ためか、出で來ら得とるだけ多く取りとりしと見み、
線路せんろの如ごき軌條きじょうの左右うしゆ甚大じんたいなる空地くうちを餘あま
し、其幅ひろは五十間ごじまん、あらんあらんと思おもはる。停車場ていしゃじょうは青泥窪せいねいくわと哈爾賓ハルビンとを一等いっとう、遼陽りょうようを二等にとう
然らず、新舊市街しんきゅうしへいを圍いめる山巒さんらんの山巒さんらんに
大石橋瓦房店だいせきばうわうてん等とうを三等さんとうとせしが、其經營えいぎの
大なるは、二等にとうなる遼陽停車場りょうようていしゃじょうの敷地しきち百二
十五萬坪じゅうごんまつ内うちに、二千にせんの洋風家屋ようふうけやうを有うすといふ
等とうは利りめて、開始はじなるものにて、人目ひとめを驚おどろか
して、より知しらるべし。但し其經營えいぎは官宅くわんたく的てきの經
營えいぎともいふべく、アラットフォーム及倉庫くらく等とうは利りめて、開始はじなるものにて、人目ひとめを驚おどろか
するものは掛員かくいんの官宅くわんたくと、備兵びへいの營舍えいしやなり。
旅顧りょくご背せき面めん面めん、堅牢けんろうなるは所謂いわゆる難攻不^可守かの
等とうは利りめて、開始はじなるものにて、人目ひとめを驚おどろか
するにして、日本兵にっぽんへいいかに勇猛ゆうめいなりとし、
到底とうぢ強襲きょうしゅうを以もつて當あるベカラホ、之のを陥おとれむ
と欲ほせば、是非ひしとも正攻法せいこうぽにより、坑道こうどうを
掘鑿くくし、進すすむの他ほかなりし。此このの坑道こうどう作業さぎょう
の困難なんぱんなる、旅顧りょくご一帶いつたいの山稜さんりょうは凡まんて石英質せいけいしつ
(燧石くわいせき)の硬かた石いしより成なれば、其そのを掘鑿くくする
するさへ容易たやすいならざるに、見渡みわたす限り起おき伏ふ

沙河方面の地形は一望すれば茫茫たる一大平野の如くなれど、丘陵起伏して波瀾状を成し、塔山三塊山など處々に崛起す。されば此等は東京に於ける愛宕山ほどのかさに過ぎざれば、多く展望を遮るに至らす。然るに両軍は皆な敵兵壕を撃つて上に木石を覆ひ、家屋を有するものは旅團司令部以上にして、聯隊本部以下は皆な穴屋なるが故に、沙河を横むて日露兩軍五十萬の大兵は那處に住るか知るを得ず。野津大將は滿洲丸一行を顧みて『諸君の目には二萬か三萬の兵にしか見へまいけれど、是で〇〇〇の兵があるのだよ』と語られしよ。

攻國軍の某聯隊長曰く、旅順防備の嚴なると、敵兵の頑強には流石の我兵も一時は持て餘し、士氣沮喪して甚しきは自から傷づけ、後送を願ふものあるに至り、大に憂慮せし折柄、内地より寄贈の毛布其他種々の軍費を負担せし上に、斯くまで心配しくる歎息は非常のものにて、我が國民が巨多の軍費を負担せし上に、斯くまで心配しくる

せる秀山のみにて、草木の蔵すへきものなければ、纏に土囊を盛りて身を隠くし、之を起點として開闢を始め、敵の攻撃を避くるが爲、主として夜間作業に依る。其苦心は到底想像の外にあり。而して其坑道の上は厚板を以て之を覆ひ、其上更に土石を以て之を覆へば、銃丸船散弾は之を駆ぐを得べきも、榴弾之中れば破壊を免かる能はず。勇士敵弾に觸れて死する豫て覺醒の存するあれど、脱糞の爲めにやられては醜耻たるを免かず、セメテ脱糞中だけにて危険ながら、めんと頑る苦心を費せりとは某將軍の語る所なりしよし。脱糞中だけ危険ながらしめんといへば、其し外はひ坑道中なりとも何時身命を失はんも知るべからざりしを想ふべきにあらずや。

かくして右に折れ左に曲り、一曲一折して其坑道を敵砲塹下に導くや、始めて爆薬を裝填するなり。其爆薬の量は、銅鍛盤を擊砲彈の爲めに擊破せられしもあり。爾れど水底に沈めしものは纔に一艦にて、他は其の意外に多しと語りし由。但だ旅順港内の大船渠は工事に手を着けしばかりにて落成し居らず、中なるもの小なるものにては戦闘を容れる能はず、此には當惑する

といふ人もあり。満洲の寒氣は意外に緩く、兵士は大抵外食り。此爆發にして一び爆發せむか、萬雷一時に激して地軸を震轟し、壘内の敵兵は砂石と共に空中に飛散し、恰かも人の聲を打つが如し。悲壯絶句とも言語に形容し難いぞ。之を要するに旅順の攻撃は人工をして到る處に磐梯山の噴火を起さしめて石とに敵を屈せしめたるなり。兒玉大將曰く『沙河の方では何門の大砲を分捕つかなしに敵を屈せしめたる事だ。旅順では人間の雨を降らして戻る』と。

旗順の艦船は自ら爆破したるもあれば、我砲彈の爲めに擊破せられしもあり。爾れど海底に沈めしものは纔に一艦にて、他は其の意外に多しと語りし由。但だ旅順港内の大船渠は工事に手を着けしばかりにて落成し居らず、中なるもの小なるものにては戦闘を容れる能はず、此には當惑する君なり。土人の言には四十年來無き暖氣なりとぞ。我兵に取りては天佑の一なる

満洲軍の給養は意外に良好にして、全く間違なし。不足なるは飲料水のみ。満洲丸一行が去る七日旅順に赴く途中長嶺子に抵りしに、停車場前の原野に一群の捕虜の後送せらるるに逢へり。或は荷物を負ふ者あれば、手にするもあり、或は立つも亦あり、座するもあり、或は整列して我が監視に附けられても持ち廻はるものあり。初めは水を飲ましむるものと思へしに爾にあたり、捕虜は其口に受けたる水を両掌に移し之を以て面を洗ふにぞありし。蓋し洗面器なく屈つ水に乏しければなり。

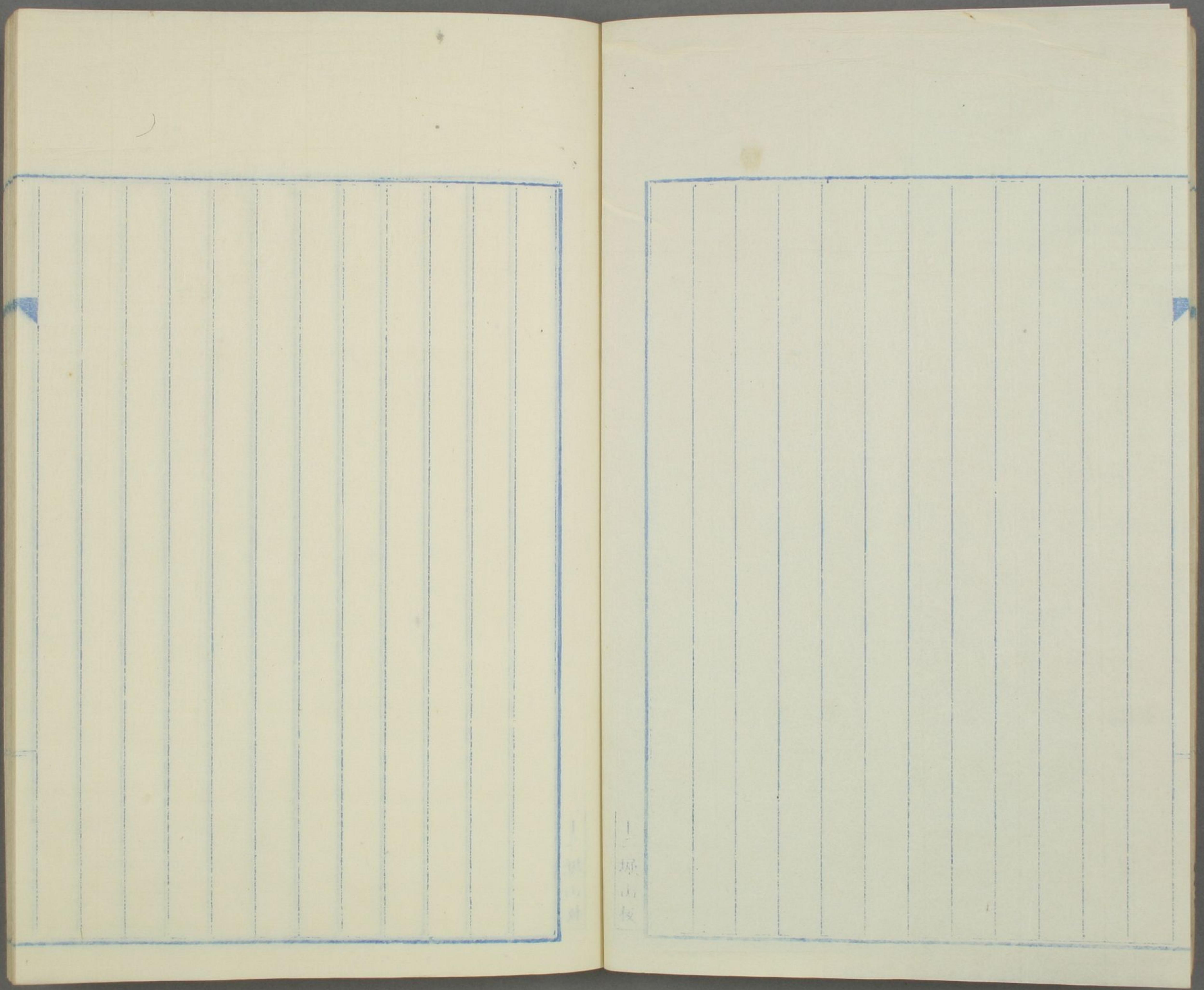
秘書と手てててしにまへて英國のきよし方、う滑稽
とよもじりい喜びは自分の國の軍艦
の一隻を何隻とも減らして船艇と云ひ
て海まで洋々と行きとどく。船艇を
も運ぶ前も也て英國衛兵から汽船を
こそこそと運びの際洋々一隻の軍艦うち雷
火艇にてとく行ふと云ふと作る。英國
報をし、えひ暴雨一般の滅して許と天と
共あし、莫寧と其の名をうつて船うつりと
運んでゆき可む。さうあたまア海外へ
去りて英國所へ日本英國船ふう汽船と云
ひと、且そりや又名番ヌ半船う羅シ

テルニテス位ビシテスモレ
○開戦以來の経験より是と洋々較く云ふ事
御と御の心在里亦モ既く得る。よほ
い化りぢや無く十倍其を云ふ後及古賀之
地に立て、朝の大と新丸所角とサリニテノ内
す。ゆる軍事も何んと考まざる者へ
そりてててててててててててててててて
トとこうにうほし得しめひあ

○朝鮮の事變上庭と日本、奄美と内すと
前ふねじありては役の一部もと多く國体のこ
とき、事あ詳のりうれ事と考むと思つて

う、すけば背はりも、うててきをうちのす
るふ、佛し朝鮮もあむ、蘇聯もそふ
國も、さうと誰もうとくと國王ひち、遼寧も日本
も東北我さんに限らぬとぞす、賄賂が大の
めおと未だそぞ、日本のもることうひす、國王
も蘇聯もゆふ、元が背負五萬い未來の大陸
穩ひ可、但其内之令をしてうけんハ呼うてぬ
ひあらう

○



上 塚 山 板

- (二) 実古体目録 (一) 実古体目録と總対を並べてさす
す總体を「アルファベット順」排列するものと云ふ
- (二) 実古体目録を大がし左の四行を並べることとの
(甲) 著者名を排列するもの
- (乙) (12) 実古体の並行と並んで排列するもの
- (丙) 著者名と著者中の要件とを混じて排列するもの
- (丁) 著者名を並べて著者名と混じて且つ之を補足
系統的に於て目録の二つは同一科目を以てして
- (三) 前項(甲)即ち著者名目録はさうしたての目的の為
め最も便利である

(1) どうや它的の圖中の著者を熟印を教示すもの

(2) 誰々の著者か一例を圖中あると教示するもの

(3) オーバー即ち書の中の要件をもとに解説し排列するもの

(4) オーバー即ち書の中の要件をもとに解説し排列するもの

研究

(1) 著者名・題名・あらすじ・序文・本文と
摘要とを並べて述べる一例(は)

Marriage in the History of the Human Mind

上巻

研究 題目や其の著者の著者名一例
記載せらる一例

(1) 著者名・題名・著者と摘要・関係セラリ
或る要件などを摘要と並べて述べる

本日は、たの研究を述べておきたい

(1) オーバー中の(1)即ち誰かの著者か、何より
やの問題

(2) Poetry 一「死と」Narcole 「死と」事の
歌」のとくにあふる Shakespeare's Dra-
ma 或、Schiller's Dramatische Kritik
等とある箇所をとて Drama と

Dramatisches Werk 集合

Richard III by Shakespeare; Schiller's
Maria Stuart Richard III
悲劇 Maria Stuart Drama

Shakespeare's Richard III. Schiller's Maria
Stuart 悲劇

(2) オニヤウの西即ちホーリー・チャーチやアラス等とも隣接する前後の久山川を構成する河川のうち、最も長い河川である。西にホーリー・チャーチの河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。西にホーリー・チャーチの河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。

次久山川は利鹿神^{リケンジン}のこと能^ノう

高^{タカ}オニヤウ即ちホーリー・チャーチの河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。

且つ之を神の系統の即ちホーリー・チャーチの最も西側の河川を構成する河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。

即ちホーリー・チャーチの西側の河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。

即ちホーリー・チャーチの西側の河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。

即ちホーリー・チャーチの西側の河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。

即ちホーリー・チャーチの西側の河川を構成する河川のうち、最も長い河川である。

二 紙類目録

(1) 紙類目録の性質とその特徴

(2) 紙類目録の性質

(3) 紙類目録の特徴

(4) 紙類目録の特徴

(5) 紙類目録の特徴

(6) 紙類目録の特徴

(7) 紙類目録の特徴

(8) 紙類目録の特徴

(1) 便宣の紙類

(2) 圖書の紙類

(3) 文体の紙類

(4) 件名の紙類

(5) 平流の紙類

オ一

(1) 紙類目録の性質
書を同一種類で集めたものにして、その編纂者
が用意をよみ
紙類目録の特徴 紙類目録をたのびる所にあつて

のちあるを

(a) 廣色をうめくもと件を取るうめくもとをうめく

あと送けるやうやうつせるもとみる場合

(b) 一つの圖書をもととするもの等へは圖書のみ

くは相似する他の圖書と見ると似て
ゆえ

(二) 紙目録の文上 紙目録は左の缺上に記す

(a) ふたえと間字と(こまきとまじとまじのま
素とまじい活版と(まきばんとまきばんと
改版と(かわんと利用と(りようと(りようと
而例のこと

(b) 技手と目録編著者と(ひじゆうしゆじゆうし
一(いっ)切(せき)改版と(かわんと)技手と(ひじゆう)

因縁あること

(c) 目録は印刷用紙と書き込み用紙の出版せら
んを場合と(まへ)ありの手数と(てうす)と
施すと(せす)と

(d) いれ目録はもと必ず別々精各ある事と
附せてるうつせる事と

(備考) ありハニモ体あらは新目録
と海藻と大差を(だいさ)手数と(てうす)と
も其効果(こうごう)ありて既(い)たるのち

例へば技手ある(は)紙及(お)條例(じり)を漫記
する体(たい)を(た)れ目録(めろく)と紙及(お)

城及西東北之鐵道並有之鐵路條
例並有之鐵道及 Railway. pp. 12. 26.
135. 189. 草とあつて之を黑田に其の孰れ
を取へきかと將つて得テ
吾は於てより多く其者を犯す
も皆多々多く平を仰るヌ若しも
一も安ては無くハサカシナヤの又は金部
と揚々々々々々々々々々々々
一も半ノレルノハタク之体乎多能セラ
ハ故々々々々のモアリヌモアリヌ

オニ

圖字の類似
(一) 圖字分類の擇舉 たうしー

〔言説別ひ類 体別ひ類(文書類)
〔文体別ひ類(形式別) 伎立ひ類

(1) 言説別ひ類 て説別ひ類とは即ち古今の文
字が今迄のもの全般の圖字を獨創而
て之を取つて取る事(即ち即ち其の形
は既に多々ありて之を以て本源の日本文
朝鮮等と之のとしより類似する所也

(甲) 英佛獨伊西蘭等の羅典文より

(乙) ペルシヤン、トルキッシュ等のアラビック文より
ヘブリニー、サンスクリット、希臘、和語西亞等の

各特別文字あり

以上の中(甲)のみを之を打混して單に英汎のされ
候る排列ある事にて不都合と生じざる(乙)(丙)
ヨーロッパ諸國の書の異なり同様にして書の
異なり(アラビック)の方(ヒンズー)の方(ヒンズー
チャカ)等(ヒンズー)をモチコロして(ヒンズー)左方(ヒンズー
チャカ)の方を異にする(ヒンズー)へあるが右側を左
後(エマ)タバサを以てある順の統一を導く、(ヒンズー
チャカ)不^可能な属字此がて併あひれども目録編纂

上充高リ於レ免・えど・よ

(12) 文体別分類

文体別分類ハ一ノに於ケ別かれ
序子よりのものと其圖書不載のものとを問ハ
單に其方式による文体と稱つておるが
例ハ教文教文と別名若くは記述論說的文

述說書とあつて云ふ

此等の文体別に於けると一文又ちよと曰ふ
きよ之と化の如きを指す記述書とも用ひ
てさうとある後述と表し書寫を含む所

果を仰ふる所

(13) 件名別分類

件名別分類とは其圖書の
開本如前等の何をも開て其化載せん所

事項(目的)を摘要する事とする。

件名別に記述の體の言葉並、文体並其と異り其の多き種からても精細に記述し得る所し
最も確定的(データーナデータ)として取扱ひ其の意をもと記入する事と併し件名別に記述を以て
主としてモルヘンシテ

主としてモルヘンシテ

件名別に類を大別して左の二種とすることとの

(甲)系統的記述

(乙)便宜的記述

(甲)系統的記述 と同一國方の件名を一切單元

的、階級的より記す事とする。

例へば社會のうち統計、政治、法律、行

商、商業、文部、國防等を立て其又所從
のりは公法私法を重き、公法の下は國際法、
憲法、刑法、行政法等、私法の下は民法、商
法等、其又民法の下は契約法権利法等を立てる。

(乙)便宜的記述 と其件名の系統的記述
すが其國中彼の性質、大小差へて國方の集
めの方事は便りに便宜的記述する事とする
例へば折々の日々論記心記、倫記等を豆
小書きと化し折々論記する、心記する、倫記する
其と同様に之を並立せしの事と記らる事の
ある事へべき事等を折々アドリ立てる

べき心地よとを全備し教育紀元第一節門
主と又と社會の下と統計政治往來を
至かられて政治のものと統合せよ、これらは
仕事の茅を立てるの趣をもよ

(圖書分類の方法)

図書分類の方法を存みばたりや

図書分類法 制限分類法 (取扱と目録) / 無制限分類法 (取扱と目録) / 用度分類法

(1) 制限分類法 とくに種の分類の標準を設け

的不制限一事より他の分類とあるとは並
排列法とて必ず二方所を擇ふる事と目録上の分
類法とて未だ未だとし一と擇方所を擇ふべきの法
を非ざるものを行ふ

(備考) 並並の分類排列法を適用する体と之
必ず記載の連絡をとる事と、なりて
其物所を取扱ふ様とへ・うすと著力せら
れ、後と併せて併せて言ふ所を上
の右便りとするべく

制限分類法中には國と被統治者とが共
有する事と即ちデウヰー氏の十進分類法及カ
タニ氏の開創の如きは之と概説するに充

の

(甲) 十進分類法
十進分類法(デシマル・クリス
ラレーテーション)とを先づ圓ち十九部つ
じう一十九色の部とを以て此等の部と付し
至る之十九門又十九色十九の數
を以て其記號とす。又更に之十九門を
つ

此方法と又記號の位をも變化するべく
之を以て各色萬般の事項を以て此等の
之を十九の數字を以て制限す。前
ノ門前題と名ふる後これを以て
是をめぐらせる所と於てあるとの例より

とす

(乙) 開底分類法

開底分類法(エクスパンション)

の數字より何のまゝ A B C の文字を以てする
ものとて何のまゝ九の數えども文
字を二十二字もううて前後を以てすれば
即ち開底の角が底くみども上に
之を窮屈と或せざる記號の並び複
数のものを免んじて是又可便りと謂
はざと渴す

上記二法のやまとせき圓古をもあしれぬる

記録と附くまことに記録を標準として
図ちをもとにしたのと同様、かく傳はシ之を本法
いわゆると名づく

(2) 組織形が記録 と記録の行数とをき
て定めずとも図ちの件名と摘要の下に図書
の記録を記入し得るよとて図ちの記録
を部の大きさを準一スぢ筆を控げて位置を示
すと書きこむと元倣する、又は目録上の位置
のすぐちの内をねらうとすると画架排列は
よくあらざるを知り、かくもたの便利である

- (a) いわゆる標準とされる物を記録の用紙を
きうちでやうやくもじめたものとし得ること
(b) 一部の図ちを数部つゝ備入するを得
ること
(c) 甲の部つゝ在るよとしの部つゝ備入す
ることを得ること
(d) 同じセリースと画架上のねじつゝが
配してあるとき同一紙上に於て之を一箇集
あふを得ること
(e) 画架上に同一セリースと集めあふとき
之を同一紙上に於て数印つゝ記すと
得ること

要するにあらわすは、画架排列の如
乃様像をより目端上に置くのが所とす
但因方より目端は、海道奉で、多く見ゆる已ト
画架上の位置より、主として、右の如きをもやうて
其地鄉と考詮とよび、其因方より附隨す
とよどへ

一 塚 山 板

○四月三十七年よりの又校報を印刷する
き圖書館の報光を調查の上作つて見る
ハ尤りとくひも。

図書館

(一) 構造

本校規模擴張の結果として五十年に三十
五年、新平野川左岸に本館の計画を立て
ルば

一本館現在迄延べ 一九十二坪合

内

吉 库

五十四坪

閲覧を許す事無く　右三十八は八合
至り而して在りの書三本と姓丸と三尾を稱する侵
入二十有九冊ある用の圖書と名づくことを得て
又閲覧を許す事無くとせよ木造二階建のゆ
あて樓上樓下の二部を併用するて所と凡て
六三名の閲覧者と定めしる。

(二) 図書

内記三十一年八月三十日御書室修了花房清教若手
本年かねに於て増加しと國子監及其種代價
算も至ては

一、卷物統計

二萬三千九百四十九部　五萬三千三百十二冊

内洋

洋書　八千九百七十九部　一萬二千四百冊

和漢書

一萬四千九十七部　四萬一千三百十八冊

一本年分增加圖書統計

二萬六千四十九部　八千八百七十八冊

内洋

洋書　十二十四部　千六百七十八冊

内購

購求　七万九十九部　十二万六十七冊

(以上施設二十一年万七千冊余合)

寄稿

二三ニ十五印

三三六冊

和漢書

二三一三ニ十五印

セキニ三五立冊

内

購求

八三四士印

四千九十九冊

(新著施法三十九本
七十九本ノア合之)

寄稿

千七三八十三印

三千三五七冊

内

購求洋書

金三三三三七十三四八十六本

全 和漢書

金一千三三二十七四九十九本

全 洋書

金三三三三七十三四九十三本

一三三城山板

寄稿 洋和漢書

金一千三八十一四七十九本

トトヒタヒ更ヒヨ前紀危カホトモ多數のよド
リ即次ノ列記スンバ

洋書

文ニ歴史 陸海政事 法律

和漢書

政治書

日本書

地圖

舊約

概要

日本書

地圖

舊約

概要

日本書

地圖

舊約

概要

(三)

開花事項

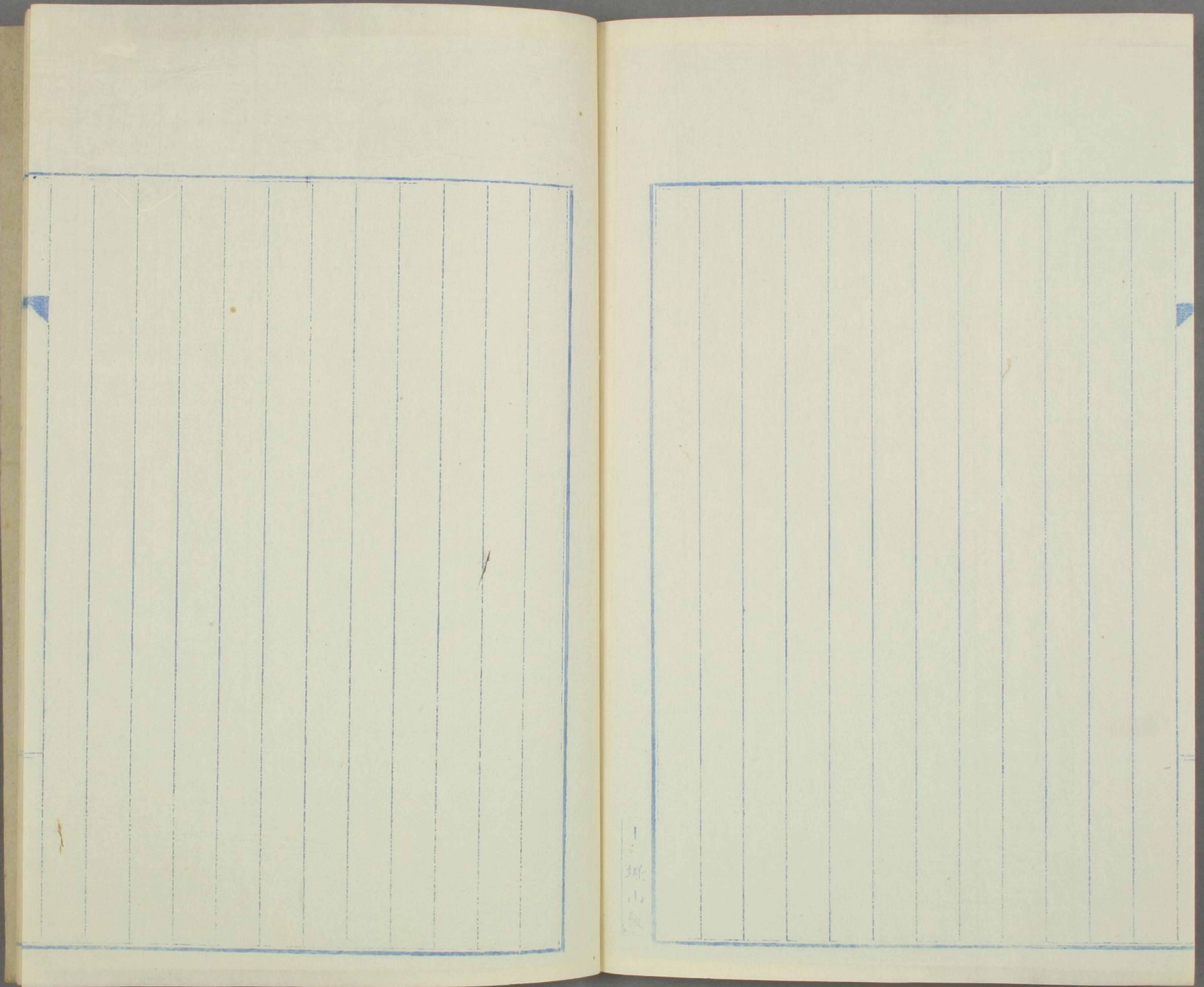
國方開花名の最古國雅と成る傳出古元

の技術又は使さんうめ前年より来野よおをにし老
了がード日野も鶴田社飯の事め教わるを
先づとせよ大ト其面目と改め閑逸もあ
多光の便益と興て字を以て其教修め始かし
追々貸出をすすむ前年又は一夫多の增加
を元もとも)

- | | |
|--------------|------------|
| 一本年より削減の数 | 二万ユ十一 |
| 一全閑逸人負弱故 | 十三萬二千八百人 |
| 一全一日平均均 | 四万八十六人強 |
| 一全貸出四万強數 | 二十三萬七千三十一冊 |
| 一全一日平均均 | 九万四十四冊強 |
| 一去納最ニ多キ四ち、往來 | |

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 文字　法律　歴史　経済歴史 | 概要　政治　宗教 |
| 一閑逸人負弱并に貸出四者、最も多キ月 | |
| 五月　閑逸人　一萬六千六百一人 | |
| 六月　閑逸人　一萬六千六百三十六人 | 貸出四者　三萬一千五百二十七冊 |
| 十月　閑逸人　一萬六千九百六十六人 | 貸出四者　二萬八千六百七十冊 |
| 貨出四者　三萬三千五百六十二冊 | |
| 更入者多ひ後年前年比と有照天月の | |
| 今 | |

開設日数	前年分	本年分	増減	比較
開設日数	一八四日	二五一日	六七日	
一日平均	土一八三一人	一二二〇八九人	七〇、二五四人	
貸付回数	二八一八六	四八六八三	二〇四人	
一日平均	一三六、九七二冊	二三七〇六四冊	一〇〇、四九二冊	
	六九三、九二冊	九四四、四四冊	二五〇冊	二



以下全て
白紙

一月三十又八年
余未之見
此草